

異常透明

海越しの遠望

三カ月ほど前、大やけどをしたコンスタンチン君が海上保安庁の航空機でサハリン樺太から直行便で札幌へ運ばれてきた。連日のニュース報道でそれまで遠い国だったサハリンが「一挙に身近なものとなった」。

事実近いのである。日本の北端、宗谷岬から海峡をへだててサハリンの南端までおよそ五十キロ^{メートル}、天気の良い日は望遠鏡で白い建物が見えるほどの近さなのである。

気象の用語では水平方向にどこまで見えるかを水平視程または単に視程という言葉を使っている。雨で空気中の汚れが落され風で吹き払らわれると空気が澄んで、稀に五十キロ^{メートル}を超えて遠くまで見えることがある。昔は「天気透明」や「異常透明」というロマンの響きをもった言葉を使っていたが、現在では異常視程とよんでいる。

さらに遠くまで見えるのが日本列島の最南端の沖縄県与那国島からの台湾山脈の遠望である。島から台湾の山々が見えると東京―静岡の距離ほどの百五十キロ^{メートル}以上の視程と

なる。島の西海岸の丘から黒潮の海越しに見えるのが年にして僅か十日ほどで、とくに夕日の沈み際には茜色の水平線に台湾の山並みを見ることがあれば幸運の二語に尽きる。世界を見渡せば、対馬から朝鮮半島の南端の釜山までがおおよそ七十キロ^{メートル}、英仏の境のドーバー海峡が四十キロ^{メートル}ほどでジブラルタル海峡にいたっては僅か十数キロ^{メートル}でアフリカとヨーロッパをわけている。国境をはさむと遠く感じるが意外に近く、いずれも異常透明の時には見える範囲なのである。

先日、コスタチャ君が病癒えてサハリンに帰ったが札幌から仙台、新潟で乗換え、ハバロフスクへ飛び故郷サハリンに戻ったが、往きの直行便にくらべて五倍ほどの距離となってしまう。天気には国境がなく異常透明で見えるほど近い距離も国境の線越しではるか遠くなってしまうのである。

村松 照男